



2009～10 年度
国際ロータリー会長
ジョン・ケニー

Weekly Report Niigata



2009～10 年度
新潟ロータリー会長
小林 敬直



新潟 RC 5 月第 3 例会 (2010.5.25) No.2849

- (1) ロータリーソング「我らの生業」斉唱
- (2) 小林 敬直会長挨拶

エルトゥールル号

昨年 12 月の新潟日報をはじめ、全国紙の地方版に載った記事のお話です。

ご記憶の方も多くいらっしゃると思います。

柏崎のトルコ村についての記事です。

柏崎市鯨波でテーマパークとして経営されていた旧「柏崎トルコ文化村」敷地内にあり、2007 年の中越沖地震で被災し台座から取り外されたままだったトルコの初代大統領、ケマル・アタチュルクの像が、トルコと友好関係の深い和歌山県串本町に移転されることになった。柏崎市と在日トルコ大使館が発表した。移転時期は今後、調整するという。

文化村は民間会社によって 1996 年にオープン。トルコ料理のレストランなどが人気を呼んだが、取引先の銀行の破綻や、入園者の減少などにより、経営が悪化。財産を取得した市が 2006 年、像を含めた施設を、上越市のプラスチック製品製造業「ウェステックエナジー」に譲渡していた。

しかし、07年7月に中越沖地震が発生。像は倒壊の恐れがあるとして、台座から外され、ウェステックエナジー社が保管していた。

トルコ側が串本町と交渉した結果、移転先に決定したという。像はウェステックエナジー社によってトルコに寄贈された上で、同町に移転される。

同町は 1890 年、沖合で遭難したトルコの軍艦エルトゥールル号の乗組員を住民が救助した縁で、トルコと交流が続いている。来年 6 月 3 日に同町で行われる、トルコ日本友好 120 周年記念事業の式典で、像が披露される予定だという。

概略すると、以上の様な内容です。

ではそのエルトゥールル号の事件とはいったいどのようなものだったのでしょうか、明治 23 年、トルコの使節が始めてわが国を訪れたが、帰路、エルトゥールル号は暴風雨に遭い、和歌山県串本沖で沈没、586 名のトルコ人が亡くなる大惨事に見舞われました。このとき 69 名が必死で海岸にたどり着き、1 人が大島の檜野埼灯台に助けを求めたのです。

大島は串本のそばの人口 3000 人の小島です。知らせを受けた大島村長、沖周(あまね)は直ちに行動を起こし、村民を指揮して救護活動に全力を尽くしました。ほとんどが重軽傷を負っていたので村の医者がすぐさま治療したのです。村人たちは裸同然の人々に衣服を与え、あたたかい食べ物を提供しました。

大島村は半農半漁です。遭難した者があれば誰でもこの国の人でも助けるのが当たり前だったので。決して豊かではない暮らしの中から、人々ができる限りのことをして献身的努力を惜まず生存者を励ました。

村をあげての救助活動に彼らはみな涙を流して感謝したのです。

また沖村長は海上に漂う遺体の捜索に尽力もしました。連日船を出し 280 体余を回収し手厚く弔慰霊行事もしました。生存者はやがて神戸に移され、明治天皇の命により軍艦 2 隻をもってトルコに無事送り届けられました。

この大島村の人々の行為がトルコ国民の心を強く打ち、教科書にも載せられました。

それ以来、トルコは熱烈な親日国となり今日に至っています。

こういういきさつがあり、冒頭の記事へとつながっていくのであります。

(3) 委員会報告

- ・柴田 史郎君へ第3回マルチプル・ポールハリスフェローピン贈呈
- ・斎藤庫之丞君へポールハリスフェローメダル贈呈

(4) 幹事報告（石井 和弘幹事）

本日午後6時より割烹「蛸」にて現・次のクラブ協議会が開催されます。

(5) 卓話「にいがた地域映像アーカイブ」

新潟大学人文学部准教授 中村 隆志氏

6月1日の例会予定

卓話「受け継がれる伝統

重要無形文化財小千谷縮・越後上布の魅力」

財団法人綾玄社 理事長

株式会社西脇商店取締役 西脇 聖 氏

ホームページを更新致しました！

新潟ロータリークラブ ホームページアドレス

<http://www.niigataarc.jp/>

「親睦活動月間に因んで」

親睦委員長 本 間 彊

今から30数年前のことです。新潟クラブに入会した翌週の例会を欠席したら、その翌日、私の推薦人であり大先輩のロータリアンから電話を頂いたことを忘れることができません。まだ30歳そこそこの若輩者でしたから、「例会」を軽んじていたのかもしれない。決して叱る口調ではなく、諭すように「入会したばかりなのに、欠席するのは良くありません。出席すれば楽しくなってくるから・・・」何が楽しくなるのかよく理解できないまま、冷や汗を流しつつイエロー・カードを頂戴したことがあります。

その翌週から自分の気持ちの中で例会出席を義務化し、実行に努めようと思いました。それは自分のためというよりも、スポンサーに対して申し訳ないという義理立てのようなものでした。

『火曜日の お昼ごはんは ロータリー』と決め、さまざまな不義理を厭わず、数年間はホームクラブのみ100%出席を果たしたように記憶しています。ロータリーの楽しさを知るのは、例会への出席を重ねた後のことです。ふだんお会いすることもないような大先輩が、緊張を和らげるため、分け隔てなく話しかけたりしてくれるロータリー。さらに厳しい指導(当時はそう思っていた)や行事に参加する過程の中で得られる人間関係が「楽しさ」へと導きます。

例会に出席し続けるのは困難を伴います。はっきり言えば苦しいことです。しかし、義務感だけで100%の出席率を得ることもできません。翻って、苦しさを超えて例会に出席して得る楽しさが、ロータリーが出席率にこだわる理由なのかもしれません。

「親睦」は主に例会と共にあります。お酒をお互いに酌み交わすことも大切な親睦活動のひとつですが、例会での親睦が何よりの楽しみとなりました。

そのことを教えてくれた、今は亡きスポンサーのS.Sさんに感謝を捧げます。